

一、大正三年の十月、<sup>雑誌の中心に</sup>方々の雑誌に書かれた評論感想を蒐め、その生の変更と新藝術と題して出したるがはじりです。

二、當時さんんに批評の事を執つてゐた山田操君に、

「帝國文藝志にこつとびどくやつつけられたのを、可なりはつきりおぼえしをきくす。當時は赫と感しましたるが、今では何んも愉快な思ひ出になつてゐます。句讀附みなど思つてはゐるせん。」

内之藤

三 羽佳